

【講演】「情報支援とレジリエンス ～鳥取県立図書館の取り組みから」

(三田)

皆さま、こんにちは。鳥取県立図書館の三田と申します。よろしくお願ひいたします。私からは、「情報支援とレジリエンス」というテーマでお話をさせていただきたいと思ひます。

まずこちらのスライド(図3)ですが、鳥取県立図書館のサービスについて簡単に表にしたものになっております。公共図書館ですので、小さなお子さまから、そして高齢の方まで、利用の対象というのは大変幅が広いということになります。例えば小さなお子さんであれば、児童サービスがありますし、また中高生の方であれば青少年サービス、高齢の方であれば高齢者サービスがあります。また、子育て世代には子育て応援サービスというのがあります。利用者の年齢に対応したサービスではなく、課題解決に対応したサービスというふうに見れば、ビジネス支援サービス、医療・健康情報サービス、法律情報サービスといったサービスもあります。本日はこういったもののなかからピックアップし、事例を紹介させていただきます。

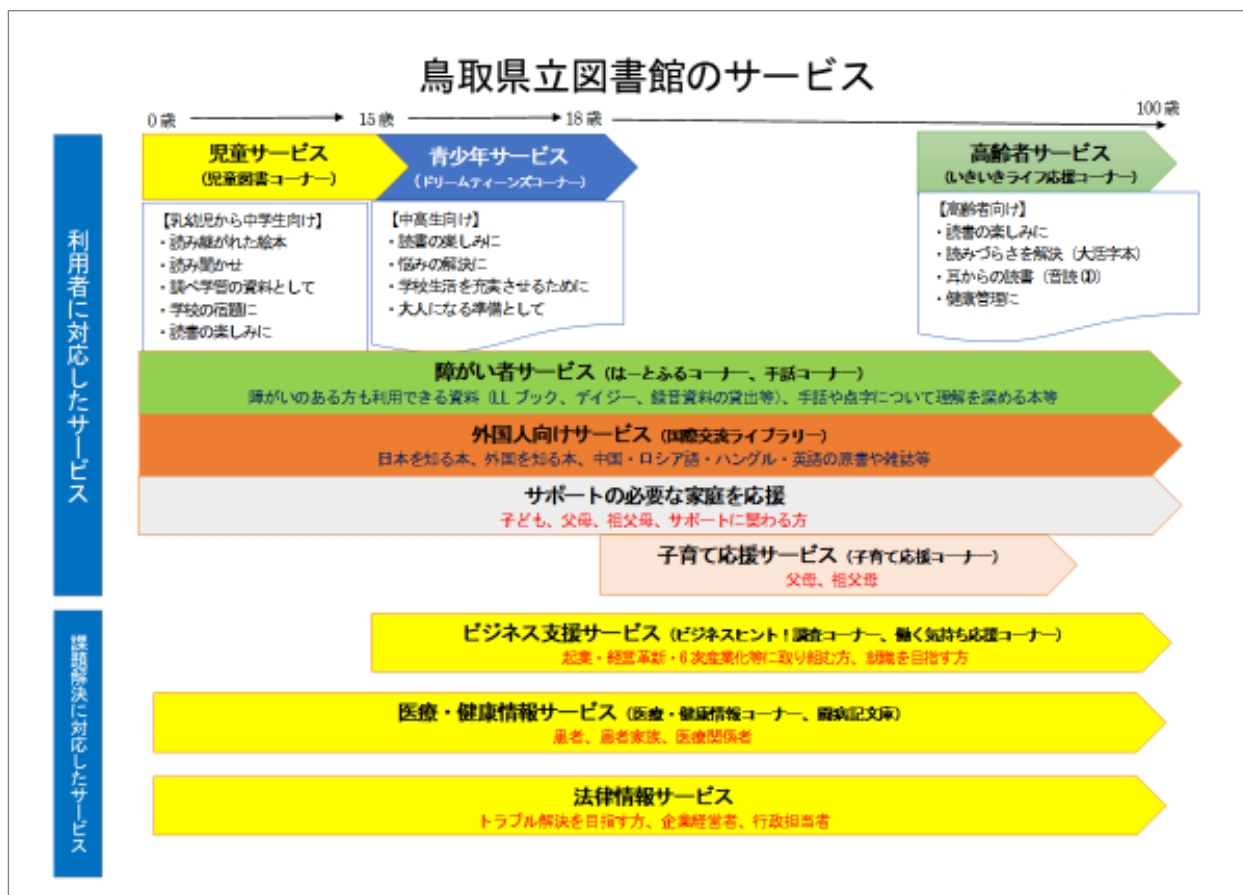


図3 鳥取県立図書館のサービス

今回テーマをいただいたときに、(いろいろと本をみながら) ちょっと気になった文章がありましたので、皆さまにご紹介をさせていただきたいと思います。これは熊谷晋一郎先生という小児科医の先生が書かれた文章のなかの一文です。熊谷先生は、生後間もなく脳性麻痺により手足が不自由でいらっしゃって、現在は当事者研究に取り組んでいらっしゃる先生です。この先生が、自立ということについて、このような文章を書いていらっしゃいます。「多くの人が自立と呼んでいる状況というのは、何物にも依存していない、そういった状況ではなく、依存先を増やすことで、一つ一つの依存先への依存度が小さくなる。そしてあたかも何物にも依存していないかのような幻想を持っている状況なのである」(熊谷晋一郎「第4章 依存先の分散としての自立」『知の生態学的転回 第2巻』東京大学出版, 2013) ということです。自立ということ考えたときに、依存先を増やすことなんだということが、図書館にもあてはまるんじゃないかなと、勝手に私のほうで理解をしたところなんです。

おそらく私たちはなにか困難に直面したときには、乗り越えるために多様な選択肢を必要とするということはあるように思います。この「選択肢」の部分が、図書館を使っていただく、そういうことにも置き換えられるんじゃないかなと考えました。

そこでですが、図書館サービスのなかで重要な機能であるレファレンスということについて、少し考えていきたいと思います。事例を紹介します。

「図書館で夢を実現しました大賞」というのは、鳥取県立図書館で平成25年度から企画、実施をしているものです。2年おきに平成25年度、平成27年度、平成29年度、令和元年度に実施をしております。図書館のビジネス支援機能、例えばレファレンスを使うとか、あと図書館で開催されているセミナーに参加をする、また相談会に参加をする、といった場面を利用していただいて、起業、商品開発、技術開発、経営改善などに成功した事例を募集するというものです。応募いただいた方のなかから最優秀賞・優秀賞を決定させていただきまして、その方々には、その成功までのストーリーを漫画にしてプレゼントしよう、そういった企画になっております。これまでの受賞作品については、鳥取県立図書館のホームページ

(<https://www.library.pref.tottori.jp/business/cat/cat6/>) に掲載しています。

そのなかから今回二つの事例を紹介させていただいております(図4)。まず、こちらの左側の事例ですが、(https://www.library.pref.tottori.jp/business/earthway_s.pdf) 生ゴミ処理機の開発をされている方の事例です。この方は、20年ぐらい改良を重ねて高性能の生ゴミ処理機を製造されています。高性能だということもありまして金額もかなり高い。この生ゴミ処理機をどういうふうに販売していこうかと販路について悩んでいらっしゃるという状況です。ご家族の方がたまたま図書館を訪ねてこられて、そのときに図書館でビジネス支援をやっているらしいとお聞きになる。そして、半信半疑ではあるけれども相談をしてみようということですね、図書館の利用が始まります。そのときに対応した図書館の司書が家庭ゴミの減量に取り組む自治体の情報をインターネットで探すなどして、この方にご覧いただいた。ちょうどそういった情報が欲しかったということで非常に喜んでいただいて、次の販路開拓の一步を踏み出していられる、という流れになります。たまたまですが、そのとき県立図書館にテレビ取材の依頼もきていまして、出演をお願いしたら「わかりました」と快諾いただきました。全国ネットのテレビだったので、すごく反響があって、販路がさらに拡大してゆくという流れもありました。

図書館で夢を実現しました大賞



図4 図書館で夢を実現しました大賞：第2回（左），第4回（右）最優秀賞

そして、右側の事例は、コーヒー豆の販売

(<http://www.library.pref.tottori.jp/business/02.pdf>) をされていたのですが、豆以外の商品はないですかというような問い合わせを受けて、そこから商品開発でもしてみようかなと行動を起こされます。そして図書館にお越しになって、ニューヨークで流行しているクラフトチョコレートの情報を得られます。カカオ豆を自家焙煎して砕いて、砂糖を加え成形まで行う **Bean to bar** というもののようですが、それについてすごく興味をもたれます。製造方法から、どんな道具が必要なのか、あとパッケージデザインどうしよう、というような話にどんどん進んでゆくわけですが、最終的には商品化に結びついた、という事例となっております。おそらくこういった利用者の方は、どちらの図書館にもいらっしゃるものだと思います。

いまの話を少し整理してみると（図5）、まずなにか困難や課題に直面する。それを解決するために、この方は図書館を使っていた、そのときに図書館の情報提供で解決のヒントがみつき、そして新たな一歩に進んでいく。これがレファレンスで満足していただいた結果なのかなと私自身は感じています。

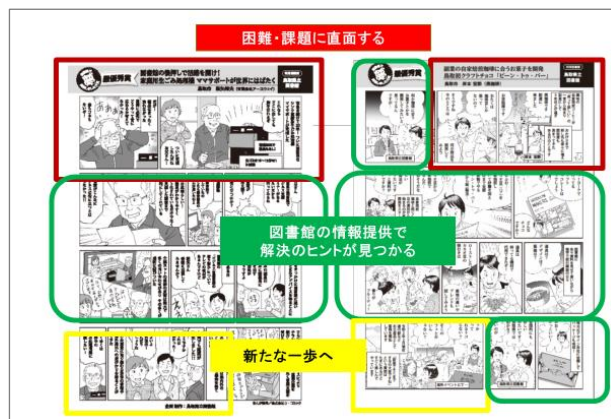


図5 課題，解決のヒント，新たな一歩へ

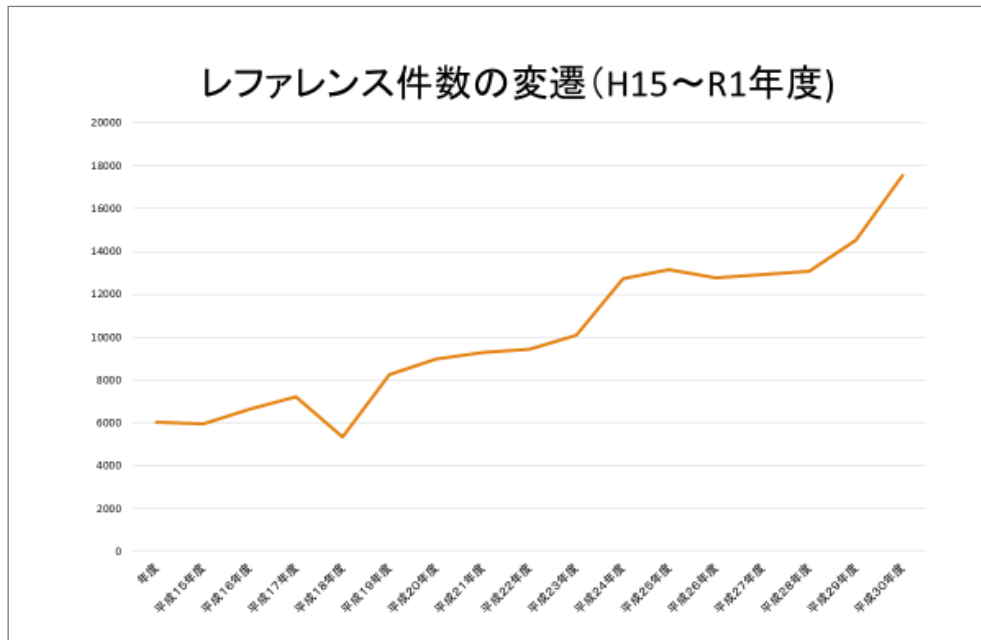


図6 レファレンス件数の変遷

当館でも年間1万8,000件近いレファレンスを受けておりますけれども、レファレンスの件数の変遷をたどってみました(図6)。平成15年から令和元年度の統計をとってみると、最初すごく少なかったのが近年増えてきているというような現状をみることができます。

ではそこで、なぜレファレンスの件数が増えたのかと考えると、おそらく私が思うには、きっかけは、課題解決型サービスを始めたことが原因の一つではないかなと思っています。平成16年度にはビジネス支援サービスを始めました。平成18年度には、医療・健康情報サービス、法律情報サービスといった課題解決型サービスをスタートさせてきております。そのときの私たちの課題意識として、住民の方、県民の方々に図書館の機能は十分に理解して使ってもらえているだろうか、という思いがありました。つまりは、本が好きな人っていうのは図書館を利用してくださっているのですが、実は図書館の機能ってそれだけではないということは案外知られてないんじゃないかなと。例えば、図書館に読みたい本がなかったとしても、リクエストができるということや、また、市町村の図書館の利用者の方であっても、県立図書館の本が利用できるというような、いわゆる基本だと思っているようなことすら、知られてない可能性もあります。鳥取県立図書館では県内の市町村立図書館に依頼を受けてから2日程度で本が届く仕組みっていうのもっています。そういうことも強みだと思うのですが、そういうことをもっと知ってもらいたいなと思っておりました。そしてもう一つは、やはりレファレンスです。課題解決型サービスを始めていく上で、やはり図書館の武器はレファレンス。「もっと聞いてください」「使ってください」とPRしていかななくてはいけないなとも思っていました。

そこで、情報を求める人が欲しい情報を得られているのかが、一番大きな課題であり、クリアしなくてはいけない問題だと感じています。

鳥取県の現状より

鳥取県統計課：鳥取県の推計人口：年報（令和元年10月～令和2年9月）より

	年少人口 （～14歳）	生産年齢人口 （15歳～64歳）	老年人口 （65歳～）	総数
令和2年	112,854	300,465	177,979	551,402（※）

（※）年齢不詳があるため、年少人口、生産年齢人口、老年人口の合計が総数ではない。

	令和2年
20代	42,976
30代	56,156
40代	72,881
50代	65,951
	237,964

20代から50代が人口の**約43%**を占める。
65歳以上の人口は**約32%**を占める。

図7 鳥取県の現状

ここでちょっと最近のデータではありますが、鳥取県の現状をお示ししたいと思います（図7）。現在のところ、人口55万人です。20代から50代という年齢に注目したところ、だいたい人口の43%を占めています。じゃあ65歳以上はどうかというと約32%を占めています。実はこの20代から50代というのは、例えばですね、ビジネス支援サービスということを考える上では、だいたい中心となってくる年代、ターゲット層にあたるかなと考えます。こういう世代の方々に図書館として本当にアプローチできているのだろうか。どういう情報が必要とされていて、その情報を提供できているか、ということ改めて考える機会になりました。それは課題解決型サービスをスタートさせる上では、この年齢構成も考えて（参考にして）スタートさせたところでもあります。

働く人たちはどうやって情報を集めているのだろうと思い、探してみました。例えば、『中小企業経営者の経営情報の収集・活用に関する実態調査』があります。2013年に中小企業基盤整備機構によって調査をされたものです。「経営に必要な情報を誰から取得していますか」という問いに対して、同業者、取引先の担当者、顧客、自分で調べるというような項目が挙がってきています。年間売上高が大きくなるにつれて、従業員、または自分で調べるというような項目が増加してきているというような傾向がみられます。では、「どのようなメディアから情報収集しているか」というと、新聞・テレビ・雑誌・ホームページというようなものが挙がってくる。日常的に業務を通じて入ってくる情報が大変大きなウエイトを占めていること、新たな経営手段を求めて情報収集をされる場合、異業種の交流会に参加するなど、そういう方法で情報を集められているということ。また新聞や雑誌、書籍という紙媒体でのメディア活用というのは、年間売上高が、規模が大きくなるにつれて活用が増えてゆく傾向にある。ということは年間売上がそれほど多くない企業様にとっては、そこまでの情報収集はできていないのかもしれないなというふうに、ここからも感じるがありました。

そして平成 28 年度には、『中小企業・小規模事業者の成長に向けた事業戦略等に関する調査』がありまして、このなかでは、「製品サービスにおける市場ニーズの把握に向けた取り組みとして、最も効果が高かった取り組みはなんですか」という問いがあります。そのなかで、テレビ、新聞、業界専門誌、インターネットによる情報収集、官公庁や業界団体、支援機関等が発表する統計レポートによる分析がとても効果が高かったと回答された方は全体の約 18%を占めています。これを多いとみるのか、少ないとみるのか、ということかなとは思いますが、これらの情報は十分に図書館でもサポートできるものだと思います。むしろ、図書館を活用していただければ、もっとたくさんの情報を提供できたのかもしれないとも思います。

これらの調査から、やはり潜在的なニーズはありそうだなと、文献を調べる、情報を調べる、図書館ができることはまだまだあるんじゃないかなと思いました。ただ、「図書館をどんどん使ってください」といったとしても、利用される方には具体的なイメージがまったくわからないということもあると思います。そこで始めたのが「図書館から情報を発信していく」という視点です。待っていても来ていただけないのなら、発信をしてゆきましょう、出かけてゆきましょう、という視点です。

ターゲットをある程度明確にして、情報を見える化してみようという取り組みですね。

(館内には)「働く気持ち応援コーナー」がありますが、リーマンショックでリストラされ、急に職を失うことが社会問題となりました。この時期につくったものになります。例えば、急に職を失ったときに、資格を取得して、次の職を目指そうという方のために資格取得のための問題集を入れました。また、面接の受け方、ビジネスマナー、賃金について、といったような、働くことをテーマにした 24 のテーマを設定して本を集めています。

また、「ビジネスヒント！調査コーナー」は、おそらく公共図書館のイメージを変える棚だと私は思っています。こちらに並んでいるのは、東京商工リサーチであるとか、帝国データバンクといった信用調査会社が出している会社情報ですね。また、起業しようとした場合には市場動向を調べるのがよくあるのですが、いろんな業界の市場動向を調べられるような専門的な資料も購入するように意識をしています。また、未来予測、1冊 20 万円程度する資料もありますが、そういったものも購入しております。1冊 10 万円以上の市場調査レポートなどもよく利用される資料となっています。なかなか一般の書店では並ばない、そういった資料がここにきていただくとみていただける、もしくは借りていただけるというような状況をつくっています。レファレンスのことも少し触れたのですが、(こういうコーナーをつくってからだと思いません) こういう本があるのなら、こういう相談をしてみてもいいかもと思われる方もあるようで、質問も専門的なもの、市場動向を調べたいというようなご相談をいただくようになってきました。

一番最近につくった棚、今年つくったものですが、新型コロナウイルスの影響を受けた県民の皆さまが活用できる助成制度、また相談事業を紹介したパンフレット、これらはすべてインターネットで紹介されていたりするものなのですが、インターネットに上がっていてもなかなか情報にたどり着けない、そこにそういう情報があるとはわからないという方もいらっしゃると思いましたので、紙で印刷したものを棚に設置しました。



気軽に相談を 相談内容が見える化する

図8 とりサーチギャラリー

ちょっとまた変わった棚もつくりました。「とりサーチギャラリー」(図8)というものですが、図書館のカウンターにはいろんな相談が寄せられます。その相談事例を紹介したものです。この「とりサーチ」という名前は、県民の皆さんと図書館との共同作業であるレファレンス、アイデアとりサーチの出会いという意味を込めまして、「とりサーチ」という名前をつけました。ここには、いろんな相談事例をわかりやすくみていただけたらということで事例を紹介しています。「ハヤブサイダー」という商品ですが、鳥取県の特産の二十世紀梨の果汁を使ったサイダーがあります。「地サイダー」に関する本をお探して、図書館に来られて、新聞記事を探されたり清涼飲料水の業界情報を調べられたりして、この商品をつくられました。「隼(はやぶさ)」というのは実は鳥取県のなかにある小さな地域ですが、若桜(わかさ)鉄道に隼駅という駅があります。この「はやぶさ」は、バイクとか詳しい方だとスズキのバイクで「ハヤブサ」というのがあると思いますが、そのスズキのバイクのハヤブサの聖地ともいわれています。年に1回その隼駅にハヤブサが集結するお祭りがありまして、「隼駅まつり」というのがあるんですね。今年度は新型コロナのために実施はできなかったようですが、昨年度で第11回目を数えておりまして、なんと2,300台のバイクが集まった。この隼駅とコラボした、このご当地サイダーということになります。

そのように申し上げると、「ちょっとこんなことで聞けないかも」と思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、あの棚のなかには、例えば「カラスが石鹼を食べるって本当?」という質問もありましたよとか、いろんな質問に対してお答えできますのでどんどんご相談くださいということで、いろんな事例を紹介させていただいています。

そして、次に図書館の機能を紹介するということですが、先ほども少し触れたのですが、やはり図書館では常識だと思っていることでもまだまだ知られてない、意外と図書館の機能をご存じないということが多んじゃないかと思います。例えばレファレンスもそうですが相互貸

借、文献複写といったことも知られていないと感じています。そこで、図書館で待っているだけじゃなくて図書館から飛び出してみましようということで出かけて行って図書館をPRするという活動をしています。商工会議所が主催されている「創業塾」。起業を目指す方、創業を目指す方が集まって勉強される、そういった機会なんですけど、ここに図書館から出向いて行きました。例えば事業計画をつくる時には必ず業界動向の分析が必要となると思います。そこで事前に創業されるテーマ、予定をされているテーマをお聞きして、参加者に合った本を持って行くなどしています。当館で契約をしているデータベースは、この場で検索をしてプリントアウトできるようにパソコンも持って行きました。例えばですね、商圈分析、エリアマーケットの分析ができるデータベースと契約をしております。「市場情報評価ナビ MieNa（ミーナ）」というデータベースがあるのですが、このデータベースを使えるように、一緒に（パソコンを）持って行ってあります。ここでプリントアウトができるようにプリンターも持参しています。本のコピーも図書館と同じようにすることができます。プリントアウトしたらお渡しするのですが、お金をいただくなくてはいけませんので、レジも持って出かけて行って図書館の機能も説明させていただきます。質問にもお答えして、この創業塾のなかで人間関係をつくって、また後日相談されたいということであれば、ぜひまたご連絡くださいとご案内をしています。

レファレンスは（図書館では相談）カウンターでお受けしております。図書館の資料を使うとか、インターネットデータベースを使うということももちろんありますが、もう一歩踏み込んで、アドバイザーの方、専門機関の方を紹介するということもあります。関係機関との連携というのを強化すること、つながるといことは非常に重要だと思っています。図書館に来ていただいた方に、図書館で専門家による相談会も受けていただけるように、月1回は特許相談会、中小企業診断士による経営相談、日本政策金融公庫による融資相談などの相談会も実施をさせていただいています。このような活動を続けてゆくなかで、図書館のレファレンスは、先ほども少し触れましたが、内容が変わってきた、高度化したのかなと思うこともあります。

次に、対象を変えた事例を紹介させていただきたいと思います。こちらの調査は3年に一度実施をされているものですが、全国の医療施設を利用する患者を対象に、医療に対する満足度を調査するというものです。平成20年の調査では病院の選択で情報が「必要であった」と回答した患者さんのうち、情報が「入手できた」と回答した患者さんは実は2割以下という結果が出ています。お医者さまなどの専門性や、経歴についての情報を調べたかった方が48.5%、そのうち入手できた方は14.7%、検査や治療方法の詳細について情報が欲しかった方が47.7%、そのなかで入手できた方は13.3%というのが実情でした。こういう状況であったというのは、私はかなりショッキングに感じました。そして平成29年にも調査は行われておりますが、同じ項目がありません。「普段、医療機関にかかるときの情報の入手先」について尋ねている問いがありましたので紹介させていただきます。「情報入手している」という方、外来の患者さんで77.7%、入院の患者さんでは82.6%で、どこから情報を入手しているかという圧倒的に、「家族、知人、友人の口コミ」が多いというのが現状です。すべての世代でだいたい7割程度が口コミで病院を選ばれているということになります。65歳未満の方は、インターネット情報を活用されており、65歳以上の方は窓口の情報、相談窓口による情報によって医療機関を選択されているというような状況がみえてきます。先ほどみていただいた平成20年、そして平成

29年と調査がありますけれども、こういった調査をみても、医療機関にかかる時も、やはりなにかしらの情報というのは皆さん求められていることはわかります。これからまた治療に進んでゆけば、また更なる情報を欲しいと思われる方も多くいらっしゃるのではないのでしょうか。

これは鳥取県立図書館のなかの「医療・健康情報コーナー」を撮影したものです（図9）。インフォームド・コンセント、セカンド・オピニオンということがいわれますが、本当に自ら情報を入手して評価判断するための情報というものは、皆さんが十分に得られているのかは（先に紹介した）調査からも感じるがあります。こちらのコーナーのなかには、入門書、病気についてわかりやすく書かれた本というのはもちろんありますが、コ・メディカルの方、医療従事者の方が使っていただける資料まで集めるように配慮しています。現在は看護師さんの利用も非常に多くなっています。また治療・診療について考える際に重要な資料だと思います、診療ガイドラインも積極的に集めるようにしています。医療情報については古い情報というのは特に気をつけて除架をするようにしていき、だいたい出版後、5年程度経ったものは書庫に下ろしています。カウンターにいるといろんな質問を受けるんですけども、そのなかには、「孫が病気になった、その病名を聞いて調べに来た」という方もいらっしゃいます。また、「治療中の病気がある、術後の検査でちょっと気になることをいわれたので、図書館に調べに来た」というような方もいらっしゃいます。

この（医療・健康情報コーナーの）奥には「闘病記文庫コーナー」を設置しております。闘病記も医学文献と同様に重要な情報源だと思います。同じ病気と闘う患者さん、また患者さんの家族の方々が書かれた手記がこちらにあります。



図9 医療・健康情報コーナー

「闘病記で生きる力を！」というパンフレットを当館で作成して配布をしているのですが、これは脳卒中で倒れて左半身に麻痺が残った方が気力を失っていらっしやった。その方が闘病記に出会って前向きになって、生きる希望を得られた。これは実際に図書館に寄せていただいたエピソードなんです、その方のストーリーを漫画にさせていただいて配らせていただいております。こちらはつくってから、おそらく10年ぐらい経ってきていると思います。今年、新しいエピソードを募集するという企画も始めているところです。

いまご紹介したようなもの以外、医療情報や闘病記を、図書館でしっかり情報提供してゆくということはもちろん大切なんです、やはり連携もこの分野でも必要だなと思っています。昨年と今年と新型コロナの影響もありまして、担当者会議（医療情報サービス担当者会議というのを開催しているんですが）も実施ができてないのですが、こういう会議を県内でもつ機会があります。鳥取県内では医学部のある大学が一つあり、鳥取大学。病院図書室は、鳥取県内には二つの県立病院があります。そこには図書館の司書がいます。そして、もう一つ鳥取市立病院という病院がありますが、こちらの図書室にも司書がいます。この司書がいる三つの病院、公共図書館の関係者が集まっています。このなかでは、日常的に困ったこと、情報交換を中心にやっているんですが、「業務上よく利用するウェブサイトはなんですか」というようなご質問があったり、「患者会の資料を入手する方法ってどんな方法がありますか」などの情報交換をしています。病院図書室に直接、本を県立図書館から貸し出しをするということもあります。県立病院は二つありますけれども、病院に本を送っております。病院図書室は専門書以外の本というのはそう多くはないもので、患者さま、そして医療関係者の方が読みたい本を県立図書館からお届けしております。年間その二つの病院で、だいたい3,000冊程度の貸し出しを現在しています。実際には、どんな本が借りられるかということ、例えば折り紙の折り方というような本もあるわけです。退院するまでの間にリハビリで使いたいということ。また入院中の楽しみとして、小説が読みたいという方、退院後の生活のために料理の本をお借りになるという方もあります。そういったリクエストにもお答えすることができます。（また、病院図書室には）気持ちや和らぐ本のコーナー「ほっとこーなー」があります。これは2017年からスタートさせたものですが、鳥取県立図書館で本をセレクトさせていただき送っています。3ヶ月ごとに本を入れ替えます。一度に50冊程度の本を貸し出しします。手軽に手に取って読みやすいような本をセレクトして、ほっと心が安らいだなあと思っていただけたらいいなと思い、本をセレクトしてお送りすることも始めております。

私どもの図書館、「鳥取県立図書館のミッション」というのは「県民に役立ち地域に貢献する図書館」です。第1から4の柱がありますけれども、いままでの活動というのはこういったミッションをもとに取り組んでまいりました。やはり鳥取県という地域に貢献することが非常に重要だと思い、活動をしてきております。

鳥取県の将来人口の推移ですけれども、先ほどは現在の人口を少しご紹介したんですが、やはりさらにどんどん減ってゆく、地域の将来に目を向けると、そういう状況がみてとれます。令和2年度には55万人と紹介させていただきましたが、令和27年度には45万人程度に減ってゆくということになります。

こうなってくると、やはり地域の課題というのは、少子高齢化と、人口減少ということ、

避けては通れないと思います。じゃあ、この状況に図書館はどう対応してゆくのかということになります。おそらく（図書館で取り組んでいる）サービスは変化してゆくものだと思っています。例えば、子育て支援も移住者の方がどんどん増えておられれば、もっと鳥取県のなかで子どもが楽しめる観光地の情報というものが欲しいと思われる方も多くいらっしゃるかもしれませんし、病院の情報についても、もっと細やかに知りたいという方もあるかもしれません。そういった地域の状況に合わせてまたサービスを変化させていくことも重要だと思っています。

そこで、地域ということ、最後にお話しをさせていただきたいと思います。鳥取藝住実行委員会という団体がありまして、そこと連携し図書館のなかで行った事業があります。「子どもの頃の場所と風景を思い出す」という企画だったんですね。参加者の方々がそれぞれの記憶を、まずテキストに起こします。それを参加者同士でお互いに読み合います。そうすると、それを読んだ方が、「ここに書いてあるものっていうのは一体どういうものですか」とか、「ここに書いてある伝統行事って一体どんないわれがあるものなんですか？」とか、いろんな質問がきます。ところがやはりご自身の記憶のなかで書かれたものであっても、実はそういった詳しいところまではよく知らないということも、改めて気づかされる。そこで図書館の郷土資料で突き合わせながら、その当時の記憶と、実際それってどういうことなんだろうと資料で調べてゆく、ということをされました。このときに、地図やまちの歴史に関する本、写真集などもみていただいたりしました。こういう資料をみながら、いろいろディスカッションをしてゆくということをされていました。

また、大学の授業の一環として使っていたこともあります。このときは、「図書館の周辺の地域を文化的な拠点エリアとする」という大きなテーマがありまして、三つのグループに分かれてディスカッションをされました。中心市街地を歩いて書店に立ち寄ったり、また工芸店に行ったりしながら図書館まで来られます。そして、その地域が抱える問題を分析して、学生の視点で地域の将来像を想像して提案していくことをされました。このときに、図書館の本をいっぱい使ってくださいなのですが、学生がそれぞれで考えて、どんな資料が使えるかを、図書館のなかから選んできてくれています。私にはちょっと想像できないようないろんな視点から資料が集まってきていました。最終的にこの三つのグループは、後日プレゼンをされたのですが、そのなかには、「おにぎりからにぎわいを」というような、なかなかおもしろそうなテーマも発表されました。

二つの事例で私が感じたのは、図書館という場所ですね。「場所」に集まっています。図書館にはたくさんいろんな情報が集まります。データベースもありますし、本もありますし、雑誌もあります、新聞もあります。そういったものをみんなでみながら、わいわい言いながら自分たちの考えだとか問題点を整理する。そういった場面に使っていただけな、というふうに思っています。

いざというときに図書館がレファレンスという機能を使って情報による支援を行うことは、図書館の重要な役割、責務だと私も思っています。ただ、いざレファレンスの力を発揮するためには、資料が重要になります。あらゆる分野の資料があること、過去にさかのぼってみられる資料があること、図書館の強みだとも思っています。それに加えて、郷土資料も欠かせない

ものだと思います。過去の歴史も、災害の歴史もそうです。文化や伝統もすべて地域情報です。いま、コロナ禍で世界中が混乱のなかにいますけれども、歴史的なパンデミックから学ぼうと考えて、スペイン風邪がとりあげられたりすると、やはり図書館にはスペイン風邪に対する質問がやってきます。「スペイン風邪が流行した頃、鳥取県はどんな対応したんですか」とか、「当時の新聞がみたいんです」という質問も今年になって寄せられています。このようにいろいろ地域資料も手がかりに調べることはありますが、調査をしながら、図書館しかできないことがあるんじゃないかな、と感じています。

情報を求める人に情報を届けたいと思っていますが、図書館だけで活動してもやはり限界がある。それも感じます。地域で活動する団体とか組織、そういったところと連携をしながら進んでゆくこと、取り組んでゆくことが、図書館にとって、レジリエンス、そういう力を発揮できる場所になるんじゃないかなとも思います。

以上で終わらせていただきます。ありがとうございます。

(永田)

ありがとうございました、三田さん、そして先ほど柴崎さんのお話を承りました。

例年ですとここで質問紙など私どもが配って書いていただくというような感じになるんですが、ご質問のある方はチャットに書き入れていただきたいと思います。しばらく休憩ですので、その間を使っていただいて結構です。どうぞよろしく願いいたします。